

分野	評価項目	具体的評価結果
教育目標・学校評価	教育目標の設定と自己評価の実施にあたり全教職員が評価に関与しているかなど体制の状況	各分掌が目標を踏まえた計画の策定と評価項目を設定し、年度始めの計画会議に提出した。これに基づき年度末の評価会議において自己評価を提出した。これにより教職員全員が目標と評価を明確に理解し、意識の共有を図ることができた。さらに次年度以降の課題の明確化と達成への効果を高めることにつながった。
組織運営	校務分掌や主幹制度等が適切に機能するなど、学校の明確な運営・責任体制の整備の状況	校務分掌組織図を作成し主幹教諭と主任を各分掌に位置づけ、その役割と責任を明確にした。また、学校経営方針を示し、各分掌の役割を示した。 各分掌では計画会議において目標と具体的方策を示した。年度末の評価会議では成果をもとに評価を行った。
教育課程・学習指導	教育課程の編成・実施・管理の状況 生徒の興味・関心等に応じた指導の方法	1年次「産業社会と人間」「キャリアデザイン」、2年次「T-GAP」、3年次「卒業研究」を通し生徒の興味関心に応じた展開ができた。特に1年次では、各生徒に応じた科目選択を実現することができた。 各教科では到達度目標を意識し積極的な学習活動を実現させた。「自由」「自律」「自覚」の教育目標と、生徒個々人が価値観を醸成する指導を心がけた。
筑波大学の附属学校として	大学との連携・協力	大学と連携し、特別講義や各種プログラムを多数開講した。全学規模の教員と連携した「産業社会と人間」特別講義、生物資源学類教員によるファカルティ・ディベロップメント、人間系教員による「心理学入門」、農林技術センターにおける生徒実習、システム情報系教員による特別講義、オリンピック教育プラットフォームと連携したオリンピック・パラリンピック教育、生命環境系教員による野外実習、大学院生による研究授業など、多くの先進的な授業を実践することにより、生徒が専門分野の学習に積極的に取り組んだ。
	先導的教育研究	国際バカロレア日本語ディプロマプログラムを導入するため、候補校から認定校へ向けての手続きを進め、2月に認定となった。これに伴い教育課程を変更し、各教科の教育内容を見直した。又、授業時数確保のために年間行事計画を見直した。
	教員養成・教師教育	教育実習は年間2回実施し、筑波大学と他大学から受け入れた。ほぼ良好な実習指導を行った。 教員免許状更新講習では、12月に「教職員の協働によるグローバル人材の育成】」をテーマに開催し、受講生からは大変高い評価を得た。
	国際交流・国際貢献	スーパーグローバルハイスクール初年度校として、先進的な活動と情報発信をすることができた。姉妹校のコルニタ高等学校と環境林業省附属高校(インドネシア)との交流を中心に、インドネシアとフィリピンでの国際フィールドワークや校外学習での学校交流などを積極的に実施した。さらにこの成果をもとに第2回全国SGH校生徒成果発表会や第5回高校生国際ESDシンポジウムを開催し発表を行った。国内外の参加者や運営指導委員から高い評価を得た。

生徒指導	生徒の人格的発達のための指導の状況 豊かな人間関係づくりに向けた指導の状況	コミュニケーション・キャンプを通し、クラスを越えた人間関係を育んだ。さらに日常的には、学校行事や掃除班編成に3年生を中心とした異年齢グループを採用し、多様な人間関係の中での団結力と責任感を育成した。 スクールカウンセラーの助言と協力、支援教育コーディネータ、養護教員との連携により、生徒一人一人に対し、きめ細やかな指導を実施することができた。 いじめ防止対策に関する組織を整備し、学校ホームページに概要を公開した。
支援教育	校内委員会の設置、支援教育コーディネータの活動、校内研修の実施等、支援教育のための校内体制の整備の状況	校内委員会はコーディネータ、教務部主幹、生徒指導部主幹、養護教諭、各年次教員で構成している。コーディネータは年次会等で定期的に情報を共有した。そのため、支援のニーズがある生徒をより細かく把握することができた。 スクールカウンセラーとも週1回以上情報を共有し、支援体制を強めた。校内研修では、支援教育に対する教員の理解がさらに深まった。
進路指導	適切な勤労観・職業観など主体的に進路を選択する能力・態度の育成のための指導（キャリア教育等）の状況	1年次「産業社会と人間」「キャリアデザイン」、2年次「T-GAP」、3年次「卒業研究」を核としてキャリア教育の充実に努めた。また、各教科や年次に於いてもキャリア教育を意識した授業作りや進路指導を実施した。 進路指導部では就業体験、進路相談会、外部機関との連携を通じてキャリア教育の充実に努めた。